

聖書：コリント人への手紙第一 11：23～26

説教題：主の死を告知らせる

日時：2022年10月16日（朝拝）

11章2節からコリント教会の礼拝と関係して生じていた問題についてパウロが語っています。大きく分けて3つの問題が扱われていますが、今見ているのは二つ目の聖餐式に関わる問題です。前回見た17節に、コリント人たちの集まりが益にならず、かえって害になっていると言われました。教会の集まりは本来そこに集う人たちにとって益になるはずのものなのに、そうになっていませんでした。18節に「あなたがたの間に分裂がある」と言われました。それは社会的・経済的に富んでいる人と貧しい人との分裂でした。それが聖餐式と関連する形ではっきり現れていたようです。当時、聖餐式は信者同士の自発的な食事会、すなわち愛餐と一緒に時に行われていたようです。その食事についてのコリント人たちの態度は「我先に」というものだったことが21節に記されていました。本来愛餐はみなで分かち合って食べる場であるのに、彼らは我先に、また自分は自分の食事をするという態度であったようです。その結果、奴隷たちや貧しい人たちが、その日の仕事を終えて到着した時にはもう食べ物がなかった。一方にはお腹一杯食べて酔っている人もいれば、一方には空腹で立っている人もいた。パウロはこうすることは神の教会を軽んじることだと22節で言いました。そういうコリント人に対してパウロは今日の箇所、主イエスが制定された聖餐式のことを思い起こさせます。この聖餐式の意味をもう一度受け止めることによって、あるべき状態に立ち戻って行くように！と願ってパウロは語るのです。

まず23節でパウロは「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました」と言います。ここの「受ける」また「伝える」という表現は伝承の授受を表現する専門用語のようです。パウロは一体誰からこの聖餐式の伝承を受けたのでしょうか。直接主から啓示を受けたと見る学者もいないわけではありませんが少数のようです。この聖餐式の制定は十字架前夜、最後の晩餐の席上でなされたものですから、当然そこにパウロはいませんでした。ですからこれはそこにいた12使徒からパウロが伝え聞いたことと考えられます。しかし彼はそれを「主から受けた」とここで言っています。これは今述べたように12使徒から伝え聞いたものであるとは言え、それは主に由来する確かで真正なものであるとの確証あるいは靈感をパウロが受けたということなのでしょう。パウロはこれを私はすでにあなたがたに伝えたと述べています。コリント

宣教時にでしょう。ですからパウロはここで聖餐式について新しい真理をコリント人たちに教えようとしているのではありません。彼らがすでに伝え聞いている主の聖餐式制定の言葉をもう一度思い起こすところに彼らの間に生じていた問題解決への道が示されて行くということなのでしょう。

さてそのパウロが受け、伝えた聖餐式の伝承について見て行きます。まずこれは聖餐式の制定がどんな状況でなされたかを伝えています。それは「渡される夜」でした。これはイエス様が誰によって、どこに渡されるという意味でしょうか。一つの可能性としてイエス様がユダによって敵の手に渡されるという意味に取ることができます。実にあのユダが裏切ったことを表す言葉がこれと同じものです（マルコの福音書 14 章 42 節や 44 節参照）。しかしもう一つの可能性もあります。それは父なる神によって死に引き渡されたという意味です（ローマ人への手紙 4 章 25 節、8 章 32 節）。この両方を考え合わせても良いと思います。確かにイエス様はユダによって裏切られ、敵の手に渡されました。しかしその人間の悪を逆に用いる仕方です。神が私たちの救いのためにイエス様を十字架の死に引き渡してくださったということです。

そうしていよいよイエス様が十字架の死に向かって渡される夜に、この聖餐式の制定はなされました。このことは何を示すでしょうか。それは主はご自分がそのように渡されて十字架の死に至ることを予め知っておられたということです。イエス様は突然思わぬ仕方で十字架の死へと連れて行かれたのではありません。イエス様はそのことを前もってご存知でした。しかも、その渡される日の当日、その夜に聖餐式を制定されました。こんな直前ではなく、もっと早く制定しても良かったのではないかと思う方もいらっしゃるかもしれません。しかしイエス様があえて渡される夜にこの制定をなさったのは、この後すぐ行われるご自分の十字架の死とこの聖餐式を結び付けて弟子たちが覚えるためでしょう。弟子たちがより明確に、はっきりと心に刻み、理解するために、イエス様はこの最後の最後の時にこの制定をなさったと考えられます。実にイエス様は十字架直前においても、私たちに与える救いのことを考えておられたのです。

さてイエス様がまずなさったことはパンを取ったことでした。そして感謝の祈りをささげた後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。」 裂いたパンを指して、これはわたしのからだですとイエス様は言われ

ました。つまり十字架上で裂かれるイエス様のからだを裂かれたパンは比喩的に表すということでしょう。実はこの「です」というニュアンスを巡って歴史的には大論争がありました。「です」と言っているのだから、これは「です」なのである！イコールの意味である！として、ローマカトリック教会はこの瞬間にパンはキリストのからだに実際に変化するという化体説(実体変化説)を唱えました。これに対してルター、ツヴィングリ、カルヴァンはそれぞれ独自の聖餐論を展開したことは有名です。しかし今日の箇所を読むに当たっては、それらに触れることは本筋から離れることとなりますのでコメントはしません。私たちがここで心に留めるべきは「あなたがたのために」という言葉です。これは「あなたがたの身代わりとして」という意味であると考えられます。本来は私たち一人一人が自分の罪のために神から罰されなければなりません。しかしイエス様は私たちに代わって罪の償いをしてくださいました。すなわち代償的贖罪のことがここに言われていると考えられます。

イエス様は「わたしを覚えて、これを行いなさい」と言われました。この「覚える」という言葉は、過越の祭りにおいてその日を「記念する」と言われていた言葉に対応します(出エジプト記 12 章 14 節)。出エジプトを導いてくださった神の救いのみわざを覚えるということです。しかしここでは主による救いを覚えるというのではなく、「わたしを覚えよ」、すなわち主ご自身を覚えよ！とされています。私たちの代わりに十字架上でそのからだを裂き、救いを与えてくださった主ご自身を！と。そのパンを食べることは、主と一体化し、主とつながり、主がくださる益にあずかることを意味します。もちろんパンそれ自体に魔術的な力があるわけではありません。イエス様とのつながりは信仰によります。そういう意味では信仰があれば他に何もいらぬのですが、弱い私たちは目に見える助けを必要としています。私たちはキリストのからだを表すこのパンに助けられて、より十字架にかかられたキリストに思いを向け、キリストがしてくださったことに思いを向け、キリストへの信仰へと駆り立てられるのです。そしてこのパンをいただく時、キリストと結ばれるところから来る恵みに実際的にあずかるようにされるということなのです。

次にイエス様は杯を取られました。25 節に「食事の後、同じように杯を取って」とあります。ここに示されている順序を考えるとどうなるでしょうか。まずパンを裂くことが先に来て、その後に食事が来て、そして杯を取るという順番になるでしょうか。これはイエス様が聖餐式を制定された時、このような順序で行われたことを示してい

るだけで、以後の教会はすべてこのように食事を挟んで聖餐式をするようにということではないと思います。しかしもしコリント教会もこれと同じように行っていたとするならどうなるでしょうか。21 節に暗示されていたように、その日の働きを終えて貧しい人たちが駆け付けた時に、もう食事はそこにほとんどなかったようです。ということは彼らは先に裂かれたパンにはあずかれなかったことになるのかもしれませんが。それなのに、そういう人々のことはお構いなしに飲み食いしていたコリント人であったということになって来ます。

イエス様は杯について「この杯は、わたしの血による新しい契約です」と言われました。杯に注がれたぶどう液は十字架上で私たちの代わりに流された血を表します。これも比喻です。この杯を見ることによって私たちは十字架で主が血を流して下さったことをより良く思い起こさせられます。イエス様はここで「新しい契約」と言われました。これはすでに旧約聖書のエレミヤ書 31 章 31～34 節で預言されていたものです。エレミヤ書 31～34 節：「見よ、その時代が来る——主のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——主のことば——。これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——主のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『主を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——主のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」これはそれまでの神の契約と全く別の契約であるという意味ではありません。これもいわゆる恵みの契約に属するものです。それが新しいと言われているのは、その大きな神の恵みの契約の中で、それまでのレベルをはるかに超える内容を持つものだからでしょう。それまでの旧約における契約は動物の血によるもので、その血は繰り返し注がれなければなりませんでした。つまりそれは一時的で不完全なものでしかありませんでした。しかしついに時満ちて約束のメシヤ、神の御子なる方の血が注がれます。それは一度ささげられればもはや繰り返す必要のないもの、一度限りで完全な贖いをなすものです。それは決定的なものであるため、34 節最後にあるように、神の民の不義を赦し、それを二度と思い起こさないという祝福をもたらします。また 33 節にあ

る通り、神の律法を心に書き記す、すなわち聖霊による内的な祝福を豊かにもたらすものです。また私たちはここで、これを単に個人的な救いという観点からだけ考えてはならないと思います。神はこの契約について述べる際、その契約を結ぶ民のことを考えておられました。31 節に「イスラエルの家およびユダの家と」とあるように、それはそれまであったイスラエルとユダという分断を乗り越えて統一をもたらすものです。33 節に「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」とあります。また 34 節に「身分の低い者から高い者まで」とあるように、様々な社会階層や貧富の差を乗り越えて一つとなる神の民を生み出すものとして考えられています。このようなエレミヤが預言した新しい契約を、イエス様がご自身の血をもって現実のものとし、そこに生かしてくださることを覚えて感謝してこれをいただくのです。

以上の主の聖餐式制定の言葉に基づいてパウロは最後 26 節の言葉を加えます。まず彼は「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、・・・主の死を告げ知らせるのです。」と言います。聖餐式は主の死に焦点が当てられています。その死は私たちのための死、私たちの身代わりのための死です。主はご自分のためではなく、私たちのためにその尊いいのちをささげて仕えてくださいました。その主の死を私たちは心から感謝して、これを高く掲げ、聖餐式の行為そのものを通して主の死を宣教します。しかしパウロの問いは、果たしてあなたがたの聖餐式はそのようなものとなっているのかということではないでしょうか。彼らは聖餐式と一緒に行われた食事会において、自分勝手に飲み食いし、自分の食事を楽しむことで思いが一杯でした。空腹な人たちがいてもそのまま放置していました。それは明らかに自己中心的な食事でした。またそこには貧富の差がはっきり表れていました。貧しい人たちはその場において恥ずかしい思いをさせられていました。そこには一致よりも分裂が生み出されてきました。果たして私たちのための主の死を覚える聖餐式にふさわしい思いで列席するなら、そこにこのような姿が現れ出るものでしょうか。主の私たちに対する犠牲的な愛に心から感謝するなら、その主の愛に打たれて、主の愛をいくらかでも映し出す歩みをする者へと導かれて然るべきではないでしょうか。自己中心ではなく互いに他者を顧み、愛し合い、仕え合う生活へと進むべきではないでしょうか。実際、救いを受けた者たちが、そうして一つに結ばれて歩むことこそ十字架にかかれた主の目的でした。主は十字架前夜の大祭司の祈りにおいてこう祈られました。ヨハネの福音書 17 章 23 節：「わたしは彼らのうちにおいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを

愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。」ここに主の民が完全に一つになること、またそのことによって神の愛を世が知るようになることをイエス様が祈られたことが分かります。ところがコリント人たちは、それとは反対にバラバラに分裂していました。ですからパウロはこれでは全然主の晩餐を守るようになっていないと言ったのです。主の死を高く掲げ、主の死を宣教するものになっていないと。

そして彼は「主が来られるまで」と最後に加えます。聖餐式は過去を振り返るものであるとともに将来を待ち望むものです。私たちのために死なれたお方は、それで終わりではなく、復活して今も生きておられ、やがてさばき主として来られる方です。コリント人たちは自分たちを霊的な人間、成熟した人間、ほとんどゴールに到達した人間と自負し、聖餐式や愛餐会を天国の前味のようにして楽しむ会としていました。確かに聖餐式には天国の先取りの意味もあります。しかしまだ最終状態に達したわけではありません。やがて主が再び来られる時に初めて最後の状態に至ります。その日が来るまでは、私たちは完成に至っていない者、まだまだ成長前進すべき者たちです。9章27節でパウロが言っていたように、自分が失格者にならないようにと緊張感をもって取り組むべき時です。やがて主が来られてすべてさばかれます。そのことを覚えて自らの歩みを整える者でもなくてはなりません。この光のもとでコリント人たちがどうすべきかが次回27節以降に述べられることとなります。

今日の箇所から二つのことを心に留めて終わりたいと思います。一つは主の自己犠牲的愛を知るなら私たちは自己中心的な歩みはできないということです。主は私たちのために、私たちの身代わりとして、十字架上で尊いご自身のいのちまでささげてくださいました。私たちは聖餐式において、そのことをリアルに覚え、その恵みに生きるように招かれています。その恵みに感謝してあずかるなら、それにふさわしい歩みが導かれなければなりません。主の愛を、周りの人との関係において反映する歩みへと導かれてなくてはなりません。そしてもう一つは、私たちは聖餐式においてただ神と私、一対一のことだけを考えていれば良いのではないということです。主の目的は一つの民を造り上げることです。私たちには色々な違いはありますが誰一人として主の前で自分を主張できる人はいません。自分で自分を救った人はいません。ただ恵みによって私たちは主を喜びとする民の一人にさせていただきました。その民の交わりに私たちは生かされています。この共同体へと招いてくださった主の恵みを感謝し、いよいよその交わりを喜び、尊ぶ歩みへと、私たちは聖餐式にあずかるたびごとに強め

られたいと思います。そしてその歩みを通して、主の死こそ私たちを救う唯一の恵み、唯一の神の知恵、神の力であることを証しし、主が来られるまで主の死を告げ知らせる神の教会の歩みへと導かれたいと思います。